生徒の皆さんへ　校長メッセージ　２月１６日（月）　No. １０

【生徒会スローガン】

Be fearless ～伝統と共に煌めく未来へ～

卒業ソングに思いを乗せて

小、中、高と校種が上がるほど、人によっても異なるでしょうが、卒業に対する思い入れが強まるように思います。義務教育ではなく、自分で選んで入学した学校であり、単位認定という厳しい関門をいくつもくぐり抜けての卒業だからでしょうか。また、年とともに感性が豊かに、そして磨かれてくるからかもしれません。

自分の胸中に湧き上がる、うれしさ、達成感、開放感、満足感、寂寥感、むなしさ・・・、それらが混じり合った深みのある、複雑な感情は行き場を求めて、表現される形を求めて、涙と結晶化したり、歌の中のメロディーに、歌詞に感情をシンクロさせ、重ね合わせ、心模様を移して、解き放ちましょう。

卒業式で歌う「遙か」という歌に、３か年の個人的な思いを込め、仲間との楽しい日々を彷彿とさせ、学習や部活動に励み掴んだ、苦労や栄光を思いだし、今日まで支え励ましてくださった家族や先生方への感謝の念・・・、心を込めて歌いきりましょう。新たな旅立ちへの決意とともに。

一年後、二年後、“ああ青春乱舞の地”、手にするものは・・・・・

卒業までの月日は決まっています。長さが決まっている分、中身をどのように充実させるかが大事です。この時は、一方通行で、巻き戻したり、やり直したり当然できません。それを知って、分かってて、人とはその日その日をむなしく過ごしてしまいがちです。**卒業時に感じる感激は、今この時につくられています。**

親も中学生の頃のように口やかましく、ああしろ、こうしろと言わない。先生方も中学生の時のように厳しくない。本当に自律心が育っていないと、生活がルーズに、惰性に流れがちになったり、物事に対しても斜に構え、一生懸命さ真面目さが影を潜め、大人に対しての接し方も節度が欠けて、馴れ馴れしくなってくる。しかし、そうならない素晴らしい人もいます。

他の誰かの人生ではない、一生一度きりの二度とない、高校時代の貴重な尊い３年間、むなしく過ごさないように、人生のリミット、期限がこの３年間と思って過ごすのと、そうでないのとでは大きな違いが出てきます。

B’ｚの“ultra soul”の歌のように、
魂を燃やして、この時を楽しみながら、おのれの限界を超えていきましょう
大きな感激と限りない祝福を手にできるように
底なしのペインに恐れず

裏面に続く

よき先輩は羅針盤・先導者、よき友は伴走者・応援者。どちらも宝です。

中学１年のマラソン大会でした。郊外に出て農道を主体に、５㎞を１年から３年まで一緒に走るコースです。

昔の先輩・後輩の関係は大変厳しい上に、先輩は怖いと思っていたので、２㎞ぐらい走ったところで、ある３年生に追いついたとき、追い越すのをためらい一時併走していました。するとその先輩は、「お前は力があるのに、なにしよるんか、先へいかんか。」と怖い顔で言われて、「はい、ありがとうございます。」と追い越していきました。何十年も過ぎた今でも、不思議と当時の様子を、この先輩はさすがだなという思い、自分の愚かしい傲慢さとともに鮮明に思い出せます。

また長くいろんな職場で仕事をしてきて、様々な上司、先輩と接して思うことは、素晴らしい先輩は、自分に厳しくそして、後輩に対しても甘くないということです。さらに、自分の後を追い、追い越すことを期待して、組織全体を視野に入れ、少し高い視点から、指導・助言をして、その人が現状を超えて成長していくことを願っています。職場を批判し、進路変更を安易に勧めたりせず、慎重に様々な事を考慮するよう促します。

よき友は、互いに磨き高め合う存在です。自分が安易で、ダメな方向に進もうとしているとき諭し、引き留めてくれる人です。

明治の詩人与謝野鉄幹は『**人を恋うるうた**』の１番の中に**「友を選ばゞ書を読みて　六分の侠気（弱い者が苦しんでいるのを見のがせない気性）四分の熱」**と詠っています。

また、江戸時代の末期、志士として活躍した橋本左内が１５歳の時、将来立派な人間になるための心得として著した『**啓発録**』には、５訓がありその一つに「交友を択ぶ」の項目で、自分を高めてくれる**「益友」**ダメにする**「損友」**があり、その見極めが大事と述べています。

次の諺があります。「類は友を呼ぶ。」英語では現在はあまり使われないようですが“Birds of a feather flock together.”自分は友に対して、どんな存在なのか、将来にわたって付き合っていける友なのか。

世の常として、**「衰退・破滅」の門は広く、「成長・発展」の門は狭く、厳しい**ものです。

そして、往々にして堕落へと誘い導く者は、最初は甘く優しい言葉で言い寄り、心強い味方然として、知らず知らず心の隙間に入り込み、不平・不満に同調し、意気投合を創り上げ、思考を鈍らせ囲い込み、安易な方へ導いていきます。

「力を尽して狭き門より入れ――ルカ伝第 13 章 24 節」

生徒の皆さんには、狭く厳しい成長の門を叩き、輝かしい未来を掴んでほしいと思います。

心を育み、脳を活性化する読書

恋愛は人を成長させてもくれますが、逆にダメにもします。相手の態度や反応に依存せず、一人の人間として、自立、自律していて自分なりのしっかりした考えがあってこそ、**対等で建設的な関係**が築けて、互いに成長していけます。恋愛は、自分を知るバロメーターかな！？

『四月になれば彼女は』　川村元気　著　　文春文庫

人を恋すれば心がはずみ、互いを知ろうと関係が深まり、日々ときめきます。それもやがて、時の経過とともに燃え上がる思いは徐々に冷めていくさだめでしょうか。一人の男性の、恋した２人の女性との関係がつづられています。男性の冷めた感じと、女性の切ない思いが対照的です。読み進むにつれて、様々なことが、思いが見えてきます。